

## 内外交差点

# Men who Causes a Storm ボコボコにされたリンカーン

秋山 友昭氏 (大丸タクシー専務) 第7/12回

「西部警察PART-III」の関西ロケが実施されていた3月初旬の石原プロモーションの小林正彦専務に同行した神戸方面へのロケハンは、名谷の視察の後、須磨離宮公園など神戸市内の数カ所を回り、無事に終了した。ロケ本隊がいる大津の琵琶湖ホテルに到着したのは夕方6時を回った頃だった。ロケ本隊はかなりの大所帯で、全員が琵琶湖ホテルに宿泊することが出来ず、僕ら末端のスタッフは近くの民宿に宿泊することになっていたのだが、夕食は琵琶湖ホテルで摂ることになっていた。夕食の会場はホテルの大広間だったのだが、驚いたことに、大津ロケに参加しているキャストとスタッフが全員その大広間に勢揃いしているのだ。上座には小林専務と渡哲也、館ひろし、柴俊夫、小林昭二など主要メンバーもいるし、さっきまで神戸に行っていた車両班のスタッフや特殊効果班の班長もいた。

後日、僕の「大師匠」の朝日放送テレビ編成局チーフプロデューサーの仲川利久さん(リキウさん)から聞いた話によると、以前の石原プロは「社内ヒエラルキー」がほぼ「カースト制」に近く、経営陣や幹部社員と現場スタッフの間に明確な「格差」があったんだそうだ。しかし、1972年ごろに石原プロは巨額の借金を抱えて倒産の危機に追い込まれた時、その体質を大きく変えて、社員をとっても大切にす社風が変わったということだった。それ以降、ロケの現場では、社長から末端の社員まで、同じ部屋で同じ物を食べるというのが、石原プロのスタイルとなったんだそうだ。タオルをハチマキのように頭に巻いて、お酒で真っ赤に染まった顔でスタッフと談笑する渡哲也を見ると、石原プロの凄さを感じざるを得なかった。昼に限界近くまで食べたとはいえ、やはり22歳の若者は腹が減るので、僕はせっせと箸を動かしていたのだが、それを近くで見ていた車両班のお兄さんが「お前って、本当に良く食うよな」と呟いた。

関西ロケも終盤となった1984年3月4日、大阪城公園で「歓迎セレモニー」が行われた。石原裕次郎、渡哲也、館ひろしを中心に「大門軍団」がステージに勢揃いして、集まったファンに感謝の気持ちを伝えるというイベントで、館ひろしのスペシャルステージも用意されていた。総合司会は大阪を代表するパーソナリティである浜村淳、スぺ

シャルゲストとして石原裕次郎の親友である西川きよしも登壇するという豪華な顔ぶれであったため、会場は多くのファンで埋め尽くされた。

僕はその現場には行かなかったのですが、どれほどの規模だったか想像もつかないのだが、この関西ロケの「最も長い一日」だったことは間違いない。その夜、リキウさんは僕をホテルプラザの自室に呼びつけた。実はこのロケの終盤戦は僕自身も非常に疲れが溜まっており、事務局での仕事もかなり煩雑になっていた時期で、僕はストレスが溜まり、それが周囲の人にも見て取れたのだと思う。リキウさんがその夜僕を自室に呼んだのは、「秋山くん、もう少しシャキッとしまえ!」と叱責するためだと思った。

僕を呼びつけたリキウさんは「精魂尽き果てた」という表情で「怖かった。本当に怖かった。一つ間違えたら大事故になって、死者は10人や20人では済まなかっただろう。明日の新聞発表では8万人と報道されると思うが、本当は15万人なんだよ。15万人なんてコントロール出来るわけがない。秋山くん、本当に怖かったよ」と、リキウさんはそれまで僕に見せたことのない弱音を吐いたのだ。

このロケ期間中、いろいろと「事件」はあったのだ。大阪市内の病院での撮影の際、地元の「ヤクザ」がロケ現場に乗り込み、「大門軍団」の刑事たちを応接室に監禁するという事件まであった。リキウさんは「ヤクザ」たちに臆することなく、輩を言う彼らをにこやかに丸め込んで見せるくらい、胆の据わった人だった。そのリキウさんが僕ごときに弱音を吐くんだから、今日の騒ぎは相当だったのだろう。いや、それに留まらず、社会人経験のない僕が仕事の煩雑さにパニックになっているのを見て、「みんな大変な思いをしてるんだ。秋山くんも少し肩の力を抜け」と言ってくれているような気がした。

歓迎セレモニーの翌日、朝日放送のスタッフから聞いたのだが、歓迎セレモニーに登壇する石原裕次郎ら石原プロの主要メンバーの送迎のため、朝日放送は当社(大丸タクシー)にハイヤー2両を依頼してくださり、リンカーン・リムジンとリンカーン・タウンカーを配車したのだが、大阪城公園で待機中のハイヤーのボンネットや屋根に群衆がよじ登ってリンカーン2両をボコボコにしたらしいのだ。ちゃんと保険で修理してくれたそうだが、石原プロは本当に「嵐を呼ぶ男たち」だった。

